

農家の数より圧倒的に多いため池

本州の最西北端に、日本海に向けて鳥がぐいっと首を突き出したような形の半島がある。山口県旧油谷町（現長門市）の向津具半島。ここはその基部に至るまで、海を望むように棚田が丘陵地帯に拓かれている。中でも「東後畑の棚田」は日本の棚田百選に認定され、「漁り火と夕日が美しい棚田」として、広く知られるようになった。近年では、向津具半島に魅せられたインターン者も増えつつある。

実はこの地域、農家戸数よりも圧倒的にため池の数が多。全国でもこんなエリアはめずらしい。車で走り抜けるだけでも、二つ三つのため池が同時に視界に入ってくる。もちろん、それらのほとんどが小さい。

『油谷町史』（平成二年発行）によると、昭和六十二年（一九八七年）、油谷町内のため池総数は一七八七ヶ所。そのうち、まさに向津具半島そのものをさすという旧向津具村には、五九三ヶ所。そして、半島の基部にあたる旧宇津賀村・旧日置村に九九一ヶ所。合わせて一五八四ヶ所である。油谷町内のため池の九割近くが、向津具半島エリアに集中している。

ちなみにその当時、一五八四ヶ所のため池が潤した水田面積は、約一〇〇五ha。町史に「単純計算では田六三アールに一つの溜池を有する勘定になる」と記載されているほどだ。

最新のため池の数を見てみる。平成二十二年（二〇一〇年）、旧油谷町内のため池総数は一四二二ヶ所。そして、農家戸数は六四九戸。現在、一戸の農家で二ヶ所以上のため池を管理している計算になる。

過去の記録では最も古い昭和五十五（一九八〇）年で、

忘れられた大地の物語を求めて

長門市旧油谷町向津具半島



向津具半島

—— 千を超えるため池群

（山口県長門市旧油谷町）

ライター 石井 里津子

ため池総数は一七二八ヶ所、農家戸数は一三四一戸である（表1）。ため池は、昭和後半に新築されたものの、年々減少傾向にある。とはいえ、農家戸数の減少は加速化するばかりで、限られた農家の肩にその荷はかかっている。

地元、日本の棚田百選認定地区の東後畑営農組合代表、三村建治さんに話を聞いた。旧油谷町農林課長を経て、長門市合併後は市農林課長を務めた人物である。

「旧油谷町のため池のほぼ九割が個人用の小さなため池です。旧町内で1haを超える大きなため池は三つ。その一つ、東後畑集落の『大堤』は一・五haほど。深さは五〜六mはありますよ。かつて最も多きときで五十人が利用していたけれど、今じゃ個人六人と営農組合だけです。」

わたし自身は、共同のため池三つに、個人ため池が五つ。田んぼ約二・七haで八つのため池。これは多い方ですね。この辺りの農家は最低でも二つ三つ管理するのが普通ですよ。最低一つは共同のため池で、ほかに必ず補完用として個人のため池をもつてますけんね」



棚田かふえにて、三村建治さんに話を聞く

【表1】旧油谷町の農家戸数と水田面積、ため池の数の変遷

	総農家数	経営耕地面積(田)	ため池数
1960(昭和35)年	1978戸	1443.76ha	不明
1980(昭和55)年	1341戸	1299.53ha	1728ヶ所
2010(平成22)年	649戸	784.25ha	1412ヶ所

表1：山口県の農林業（世界農林業センサス結果報告書）等をもとに山口県農村整備課よりデータ提供

ため池の現状について、三村さんは続けた。

「十数年前からは、ため池改修事業の地元負担が十五%から二%と軽くなり、ため池の補修もいくらか進みましたが、ほとんどが江戸時代にできたもので老朽ため池ばかり。意欲のあるところは補修を進める一方、離農するため池もそのまま消えていってますね」

伝統行事「さるをうち」も残しながら

二月の北西風が吹きすさぶなか、ため池そばに建つ石碑にしめ縄がまかれ、白い御幣がはためいていた。近づいて確かめると、ほかに細い竹筒と不思議な形のわら細工が下げられている。

三村さんにたずねると「二月のはじめ、庚申塚に『さるを』を供える行事」だという。「猿尾」と漢字では書くとのことだが、これはわらで編まれた民具の名称である。

「ここでは、昭和三十八年頃まで牛に鋤を引かせていたんですよ。牛に引かせる横棒と鋤をつなぐのが『さるを』。昔は必需品です。一月二月に、お供え用のさるをと一緒に自分の家で一年分使うさるをも集

まって作る。これを『さるをうち』というんです。お供え用は実際に使うものより大きめに作



深田ため池の脇で、「さるをうち」の行事で祀られた庚申塚。「さるを」と一緒に、細い竹の先に御幣がつけてあるのは「地神祭り」用のもので「さるをうち」とは別の行事用。だが、近年はこの2つの行事をわずらわしさからまとめるところも増えたという。三村さんのところは行事を残す意識が強く、地神祭りは2月後半に別途行う

向津貝半島を空から望む(山口県農村整備課提供)。「向津貝」というユニークな名前は、古来の呼び名「向国(むかつくに)」「向津(むこうつ)」が転じた説などがある



日本の棚田百選認定「東後畑の棚田」展望台横にある全国ため池百選の「深田ため池」。池の真中には浮島も。池のほとりに2014年夏、空き家を活用したNPOによる週末のみのカフェ「棚田かふえYou家(ゆ〜や)」もオープン



る。各家五〜六本は必要じゃったから、六軒あったらその六軒分をまとめてみんなで作って帰りよりました」

集落内の、近所の小さなまとまりが一単位となり、今もみんなで祭事に向け供え用のさるををうつ。

「わらを三つ編みするから最低四人は必要。四人集まらんようになったら、この行事もけんようになる。行事は残さんと集落が荒れるんですよ。こうした行事は農業をやるもの原点。昔から水の喧嘩、道の喧嘩があっても行事の日には来る。そして行事のあとは酒を交わす。こうした場が作れんと、許容範囲が狭くなつて荒れていくんです」

集落が荒れば、田んぼも荒れる。大地に根を張る人が腹底で知る危機感だ。そして「ため池の機能が弱ると田んぼが荒れてくる」。ため池が老朽化し、漏水等がはじまると、その水がかりの田んぼは必然的に荒れていく。

それでも三村さんは、ため池の未来を描く。「大きなため池で小水力発電ができないかと考えているんですよ。広さはなくとも高低差がある。落差を利用して発電ができないかと思うんです」

ため池がもつポテンシャルを最大限に生かしたいというのだ。

「景観としての魅力も大きい。さらに、ため池には野鳥がたくさん来る。カモ類とかカイツブリやウなど。池のフナを食べたり、池底のへどろの中の餌を食べているみたいです。もちろんサギ類も多くなりますよ」

千を超えるため池群。これらを文化や生態系も含めた地球財産的な発想でとらえていけば、新しい物語が動きはじめることだろう。